

【屋久島の天然記念物調査報告】

やまもとひでお
山本秀雄

屋久杉の天然記念物指定調査報告書について

大正八年、国は「史跡名勝天然記念物保護法」を制定し、自然界の記念すべき価値のある動植物や史跡等を保護することになった。

その保護法によって、屋久杉の原生林も大正十三年（一九二四）天然記念物に指定された。

指定に先立ち内務省は田代善太郎先生（当時加治木中学校のち京都大学に勤務）に委嘱して、屋久島の植物実態調査を実施した。調査は大正九年に始まり同十二年に終わっている。内務省はその報告書を「天然記念物調査報告・植物之部」（第五輯）に収録・大正十五年に刊行している。

田代先生は、それ以前来島三回（大正六〜八年）、既に屋久島の植物調査を手がけておられた。内務省委嘱もその実績に基づくものと思われる。

屋久島は明治の地租改正に端を發した林地官民所有権を争って、明治末から大正にかけて十七年間行政裁判がつづいた。大正九年原告（島民）の敗訴で決着をみた。が、長期間に及んだ裁判が島民の生活を窮状に落とし、一方で

敗訴を予期した関西実業家が、屋久杉の縁故払下げ運動②島民には当然特別払下げが行われる、その際伐採等の業務を一切代行する契約書に調印を勧める派と、島内良識派が対立し、島を二分する社会問題に発展したことで、県はこれが収拾策を政府に要請、大正十年五月に重

大な「屋久島国有林経営の大綱」（山林局通牒林第一五四一号）、俗に「屋久島憲法」という救済制度がなされた。国有林中、前岳部分七千町歩が島民に開放された。全国に例をみない屋久島だけに与えられた委託林経営方式である。勿論屋久島国有林事業も大正十年が開始の年である。大正十三年には鹿児島大林区署宮之浦派出所から上屋久・下屋久両営林署に業務は分担拡大された。林班区画が整理され、林野の保全にとどまらず、育苗造林・林道開鑿・殊に森林軌道開設や屋久杉伐採生産事業は最も重要な時代に入ってゆく、択伐等経済樹木の調査・植生分布調査に至るのは漸く昭和の代になってからのようである。

鹿児島県が東大理学部植物学教室の正宗嚴敬

先生に委嘱した「史跡名勝天然記念物調査書」第三輯（屋久島植物誌）というのがあるが、実は昭和四年屋久島営林署発行「屋久島植物誌」と内容・発行日共に同一であることから両者の共同調査によって生まれたものか、田代先生の調査に遅れること六年である。

因みに田代先生以前の屋久島植物調査関係を手元資料にみると、①明治十五年、屋久杉の立樹数を確認した記事が（林学会集誌6・7・8の各号に掲載）調査高島得三氏）、②明治四十二、三年牧野富太郎博士の植物採集調査、③大正三年アメリカのウイルソン博士の「サクラツツジと針葉樹」の調査、④大正元年熊毛郡教育会編「熊毛郡植物目録」（落合盛吉博士調査）、⑤大正十二年長尾巧・山口謙次両氏編の「屋久島植物目録」（未見）、⑥大正十二年正宗嚴敬先生は屋久島の地理学的生態分布調査をはじめ、最晩年まで屋久島関係の論文を多数発表された。

なお屋久島関係植物文献資料は千点にも達するといふが、多くが昭和年代に入ってからである。ここには割愛させて頂く。

ところで紹介する田代先生の屋久島「天然記念物調査報告」は、その目次が、

- 一 位置地質地形及び気象
- 二 屋久島国有林事業区の区画
- 三 山林の状況及植物の分布
- 四 屋久島天然生の杉
- 五 天然記念物として保存すべき植物並びに保存の方法

十七葉が挿入されており全七〇頁をかぞえる。当初全頁を本誌に紹介することを考えたが季刊雑誌のことバランスを失うおそれから、目次の四「屋久島天然生の杉」のみを本号に抄出するにとどめるが、屋久島「天然記念物調査報告書」は、屋久島が今日世界の脚光を浴びる「世界自然遺産登録」の背景をなす植物分布を、垂直に

屋久島の天然生の杉

屋久島に於ける天然生の杉を区別して、屋久杉といひ小杉といふは、全く利用上の便宜より下したる名称にすぎずして、同一の品種が同様の地質を有する土地に生ずるものなるも、なほ樹齢に応じ樹幹枝葉の発育と材質とに相違を来すにより、老木にして木理の見るべきに至るものを屋久杉と云ひ（之に近きものを准屋久杉と云ふことあり）、樹齢なほ若くして発育旺盛なるものを小杉と云ふ。之に対して内地にて行はるる杉造林法によりて仕立てられたるものを地杉といひ、僅に前岳下部の民有林中に見ることを得べし。

天然生杉生育の地域は屋久島国有林の殆ど全部にして、屋久島は今日に於いては千メートル以上に多く、前岳の七百メートル内外の地点より之を見るを普通とすれど、山路険峻にして交通の便あしく伐採の手の及ばざる所にては、五六百メートル以下の地点に存することあり。而して其の遺株は往々それよりも下方に発見せらる。由来屋久杉にて、目に触れ易きところに残存するは、多くは斧痕を受くるも、良質ならざるが為に伐採を免れたるものなり。小杉はなほ下りて各方面三四百メートルに存すれど多からず。もと両者は生育の範囲を同うしたるものにして、元来屋久杉は現在の小杉の生存せる地帯にありて夙に伐採せられたるものなるは現に其伐株の残留するによりて証明するを得べし。而して伐株の

調査した最初のもので価値ある文献である。よって屋久島関係の全頁は後日、復刻の上ご高覧に供する予定である。

幸い田代善太郎先生のご遺族田代晃二様に復刊のご了解を頂きました。付記して感謝しお礼を申し上げる次第である。

残存数が生存せるものに比して多きを見れば、屋久杉昔時の盛観を想像するを得べし。現在の生育区域は屋久杉八千町歩内外小杉二万町歩内外にして、其蓄積屋久杉約五十九万石小杉約四百六十万石を算す（鹿児島大林区署調査）。

一体に天然生の杉就中屋久杉の最も多き地域は、前岳の内側と奥岳の斜面にて安房川上流の地域（即ち小杉谷と荒川谷）とす。東西南北共に五千間なり（其中にても峯筋は質悪くして量少し）。而して屋久杉の特に生育よろしきを以て知らるる所は、ミセ及びコウノイタ方面石塚山腹の上部及び八左衛門山にして東向或は南向なり。一町歩に六七本を生ずる所あり（普通は五六町歩に一本なり）。此地域にてはスギ目立ちて多き様に見ゆれど、鹿児島大林区署にて石塚国有林四十二林班中の面積三十町歩につきて諸木の割合を調査したる結果を見るに、モミ・ツガ二万石に対してスギ千石に足らず、却つて潤葉樹の混在するもの二万石なり。スギの純林状をなすは、かつて天然更新をなしたる所に限る。例へば小杉谷の一局部石塚山其他に於ける焼山の如き之なり。

備考 小杉谷は安房川筋にあり宮之浦を距る三里、安房を去る四里なり。

屋久杉伐採及び小杉造林の史実につきて聞く所によれば、小杉谷中にて立木の最も多く成長旺盛なる所は、所謂御立山にして、今を距る二百

年前後薩藩によりて行はれたる大伐採と共に、此の制を創始せられたるによるものなるが、其年代はここに現存する小杉の樹齡にて知ることを得べし。実に御立山は船舶用材を仕立つる目的を以て設けられたるものにして、其地にありし屋久杉其他を伐採して平木をつくり、之を乾かす為に雜木を切り払ひて燃料となし、其跡を天然更新によりて造林せしものなり。御大典紀念造林の天然更新による例をみれば、容易に之を理解することを得べし其の地は杉の生育宜しくして雜木甚だ少く、殆ど杉の純林と稱するも可なるを見れば、元來地質地味其他の条件共によろしき地を選びたると共に、天然更新を好適ならしむる注意を払ひたるを想像するに難からざるなり。常時にありては造林の規模大なりと云ふべし。なほ薩藩時代には年々屋久杉を伐採して、之を平木に造らしめて之を上納せしめ、それと引換に食米を下附したるものにて、切株一丈内外の高さなるが残れるは、薩藩時代に伐採せられたるものなり。屋久島に小林区署の設けられて後、三十七八年頃より屋久杉を民間に払下げ、四十年頃には生木濫獲せらる。之により交通の便あるところの良材は大概失はれたりといふ。大正五年斫伐事務所を開き、立木払下をやめ倒木切株のみを利用するにつとめたり。

屋久杉其他につき調査せる実例を述ぶるに先だち、屋久杉の形質を考究すべし。屋久杉は殆どすべて樹梢を欠き、枝は數枝をつくるに過ぎざるを常とし、一枝にてなほ生存するものあり。樹態も枝振もスギの如くならず。葉は細且密、其觀蒼黒なり、春なほみどり少きを以てなり。栓皮は粗ならずして剝離せず。肌色は灰白にして滑沢あり、雲紋状の斑理をなす。成長の遲鈍なることを察するに難からず。材は心材を失ふて空洞をなす。周材は材質緻密にして、木理線状をなし、色の变化あり光沢あり、生木は赤味多く又樹脂著しく多し。木理にさきめともくどあり。柱目は得られず。纖維真直ならず。多少波状をなすが故なり。屋久杉の大きは、現存するものにては、胸高の圍四五丈なるを大なりとすれど、昔時はウイルソン株の如く、根際にて五丈九尺余、地上一丈五尺以上に圍四丈三尺に達するものあり。胸高の圍三丈内外のものは普通にして、

峯筋にあるものは二丈内外なり。樹の高さは現存せるものにては目測二十間内外なるを大なりとし、普通のもの十數間、峯筋にあるは十間内外なり。ウイルソン株の如きが生存したる時代には更に高さものありしならん。

屋久杉の推定樹齡は千年に近く、稀には二千五百年或は三千年に達するものあり（小杉は五六百年）

屋久杉実例の一 八左衛門山の屋久杉（第二十六圖参照）

高岳の中腹約千メートル緩傾斜の地にあり。小杉谷官行斫伐事務所より宮之浦越を行くこと一里弱にして、山に入り五町ほどにして達す。ウイルソン株より一町ほど手前なり。根際より五尺の所にて圍四十四尺、高さは目測二十間許、ヤマグルマ・サカキ・サクラツツジ・ソゴ・アヲツリバナ・ヒノキ等着生す。

八左衛門山は屋久杉の多き地域の一にして、谷一つ隔てたる峯（高岳の山腹）には、目通りにて圍五丈以上に達する屋久杉中の第一樹ある由を聞くも、雨天にて探究する能はざりしを遺憾とす。（森林主事瀬戸口直次氏の談によれば、楠川の木挽山崎利右衛門其位置を知ると）。

屋久杉実例の二 安房川林道（第四二區監督事務所）附近の屋久杉（第二十七圖版参照）

安房より約四里にて七百メートルの地点にあり。稍斜に河岸にたつ。胸高にて圍三丈、高さ目測にて十四五間。林道工事に従事せる人夫四五人を使役し、附近にありし樹木及び其枝を切りとりて撮影せり。ヒノキ・クロバイ・ナナカマド・ヒカゲツツジ・サクラツツジ・ヤマグルマ・アキシバモドキ・サカキ・アヲツリバナ・スギ・アツイタ着生す。

因に記す。近頃瀬戸口直次氏より聞く所によれば、安房川筋をなほ少し下れる川向に圍五丈許の屋久杉あり。一昨年施業案計画を立つる為測量をなしたる折、使役せる人夫中に其位置を知れるものありと。

屋久杉実例の三 石塚山歩道傍近くにある屋久杉（第二十八圖版参照）

小杉谷より約二十町千メートルの地点にあり。緩傾斜のところ立つ。胸高にて圍二丈八尺、枝下約九間、枝二又、一つは枯れ落つ。枝上約五

間なり。樹幹ねぢれて材質よろしからず。着生するものにて注意をひくものはナナカマドなり。地上雪をしく。附近には、伐採木の枯株にて切口の径一丈一尺なるものあり。又焼山附近には囲三丈許にて良質の屋久杉ありといふ。

コウノイタ屋久杉産地（第二十九図版参照石塚登山の途次、小杉谷を距ること約十七町九百メートルの地点にてコウノイタ六合目以上屋久杉の多き所を写す。幹の白きは主として屋久杉なり。）は相接する三瀬と共に良質の屋久杉を産するにより名高き所にして、東二十九林班（宮之浦岳国有林のうち）に属す。三瀬は其南にあり。明治神宮御造管用材（十本）を伐採したるところなり。

太忠岳国有林中の保護林（第二十九図版参照石塚山上にて、太忠岳国有林の二十六・二十三・二十五林班に属する山林を写す。保護林其中を貫く）スギにツガを混じ各種のスギ多き所なり。屋久杉多き地域の一なること前述の如し。



田代善太郎先生

石塚山尾之間道の鞍部にある保護林（第三十図版参照交通路より西に向つて写す）約千四百八十メートルの地点横岳の山腹太忠岳第二十七林班にあり。杉の純林にして屋久杉、准屋久杉を併せて多し。手前に見ゆるはツガ・ヤクシマシヤクナゲ・サクラツツジ・ハヒノキあり。路傍にある屋久杉につき観察するに胸高にて囲二丈内外、幹の上部折れ高さ五六間乃至七八間、枝一二、多きも数枝にて生育す。此辺より女岳山腹を望めば樹幹の白きが多く見ゆ。屋久杉の多きを想像するに足る。

小杉谷の准屋久杉（第三十図版参照）小杉谷斫伐事務所附近にあるものなり。

小杉谷御大礼記念造林中に残れる准屋久杉と小杉と杉の稚樹（第三十一図版参照）此准屋久杉は胸高にて囲一丈四尺六寸、高さ約十間なり。造林は天然更新によるものにて、大正四年十二月十六日竣功し、反別五町九反三畝歩なり。枯株のなほ残れるあり。リウキウイチゴ・オホバライチゴの繁茂せる様没風流なり。されど稚苗密生して發育よろしければ、やがては御立山の如く杉の美林を現出すべし。造林中に残れる小杉は

前略

自然を大切にしたい家ができました。

子供たち

みんなまで

遊びに来ませんか。

草々

「風樹庵」



二百年前後のものなり。

同上の造林中に残れる小杉(第三十一図版参照)胸高の囲七尺三寸、高さ目測にて約十二間、百八十年位を経過したるものなり。

安房川より同上の造林の東部を見たる景(第三十二図版参照) 准屋久杉(中央)あり、小杉あり、稚苗あり。

同景中の一小杉と稚苗(第三十三図版参照) 稚苗は密生して三尺以上に伸長す。

小杉谷斫伐事務所の西にあたる小杉林(第三十四図版参照) 御立山發育旺盛なる小杉の林の一部なり。小杉は四十三林班及び三十三林班に跨りて多し。白雪を戴く山嶽は宮之浦岳なり。

因に記す。永田方面には、標高約七百八十メートルの地点に、俗に七尋と称する大杉あり。枝多し。

ウイルソン株(第三十五図版参照 北より写す) 小杉谷官行斫伐事務所より、宮之浦岳道一里弱のところより六町ほど入りたる所、千百メートルの地点にあり。高岳の山腹ハ左衛門山と称する所にして、屋久島東事業区三十三林班(上屋久村大字宮之浦、宮之浦国有林のうち)に属す。根廻り百七尺二寸、幹の根際五十九尺二寸、幹の切口四十三尺三寸(幹の高さ一丈以上、地表より一丈五尺乃至一丈八尺の所にて)、枯株の東側に小杉の生木あり。約百七十年を経過せるものなり。内部に空洞あり。入口南に向ひ自由に入入りすることを得。大正の初め頃まで其伐採面に屋根を造り、洞底に板敷をなして、木挽小屋に用ゐられたるものにして、其板敷は今なほ存せり。略、南北の方向に通路を取り、其の左右側の板敷を居室とし、中央に囲炉裏を設けたり。北の詰や、東によりて清泉混々として湧き出で、一條の小流となり南に向つて洞外に出づ。洞底より五尺の高さにてはかりたる南北の径一丈五尺三寸、東西の径一丈四尺一寸あり。約十年前ウイルソン氏の植物採集に同行せる(?)鹿兒島県林業技手たりし小林求吉氏の調査によれば(当時の新聞記事)「件の屋久杉は地上十二尺の箇所にて伐採せられ、本株は一二尺の側壁ある

のみにして内部は空洞となれるも、其胸高周囲は約五十九尺六寸、空洞内底面の大き三百三十九平方尺九三に達し、之を坪敷に換算すれば九坪半の広さとなり、試に日本風の畳敷とすれば六畳間三室余の面積を有し、総計畳十九枚を敷き込むべし」と。ウイルソン株の名を得たるは、ウイルソン氏の宣伝によりて世に知られたるが為なり。附近に生ずる小杉の生樹の樹齡より推すに、該株の伐採は今より約百七十八年乃至二百年の間にあると思はる。此木の末梢が伐倒されたる折の位置を其儘に存するより推定して、樹高が約二十四五間ありたらんと想像せらるべしときく。屋久杉材の耐久性より考ふれば、今後幾百年も腐朽することなくして経過せん。

大転倒木の一例(第三十六図版参照) 東二十五林班(太忠岳国有林のうち) 内七百メートル以上の地点にあり。安房林道第四工区監督事務所より、三町ばかり旧安房道に入り込みたる所にして、転倒木の切口の横径一丈八寸、縦径九尺以上(広きところにて)。附近にたつ小杉は根際にて圍九尺七寸五分、胸高にて九尺二寸五分あり。樹齡二百年前後、緩傾斜の地にあり。溪流にのぞむ。此の転倒木は材質よろしく、之より盤木を得たること多かりしと云ふ。樹齡は年輪より推算して約千年と思はる。なほ円盤採取をなすに足る。

之よりなほ安房への旧道を進み、峯筋の保護林中に小杉の多き部分を越ゆれば荒川あり。少しく上れば安房川を隔てて愛子岳につづく峯筋の下部七百メートルの地点に、「ジトンジの七尋まはり」として知らるる最大の転倒木あり。安房よりは三里ほどの所なり。転倒木の外面には雑木繁生して小山の如き觀あり。十尋もあらんかと思はるる内部の洞内には幾十人を容るべし。

此他に転倒木の名あるものに大洞杉と称するものあり。花江川より栗生へ下る道にあり。約千メートルの地点なり。幾つかに切りたるが残る。下部の径一丈五六尺あり。今回は踏査の余裕を得ざりしを遺憾とす。